

デバイン  
ハート

# マリア

～反逆の女神～

立ち読み版

小説 黒井弘騎

挿絵 KAGEMUSYA

第一章	Renegade	006
第二章	Encounter	060
第三章	Reprocess	110
第四章	Obedience	162
第五章	Hart	205

## 登場人物紹介

Characters



くるす まきな  
**来須 麻希奈** / デイバインハート マキナ

悪の秘密結社「ミレニアム」によって人体改造を施され創世の宝玉を埋め込まれた少女。研究所からの脱出に成功し、父の仇と正義のために戦っている。

くるす ありあ  
**来須 亜里亜**

麻希奈とともにミレニアムに捕らわれ、慰み者にされた妹。麻希奈の脱出時に生き別れ、以降の消息は不明。



なるみ

### 鳴海

悪の秘密結社「ミレニアム」の日本支部長。自らが新世界の支配者になろうと策謀している。

（ふ、太いっ！ 太すぎるの……い、いきなりなんて。こんな奥まで、いきなり……っ！）  
 これまでのねちっこい愛撫から一転、スパイダースレイブの挿入は力任せで逞しいものだった。両太もを限界まで左右に押し広げ、狭隘きょうあいな肉穴を無理矢理に拡張しながら、一気に最奥までブチ込まれる。

「んあああ……あぐううっ！ ぬ、抜いて……はあ、あ、ああっ！ こんな、ふ、太すぎるの奥までなんて……は、はやく抜け、抜きなさい……いっ！」

膣道が軋み、圧迫感で呼吸もろくにできない。紅潮した美貌を汗と涙で濡らしながら、しかしマキナは気丈な態度を崩さなかった。あくまで強気な命令口調で、男を拒絶する。

「相変わらず口の悪い女だな。人に頼み事をするならもつと言い方があるだろうが。もつとも……許しを乞われても手加減する気なんぞねえけどよお！」

「ひっ……ぐああ、あっあああ——！」

ズブ、ズボ、ズボズボズボッ！ 最奥にまで突っ込まれた肉棒が、激しく抜き差しを開始する。激しいストロークのたび蜘蛛腹状の力に膣壁を抉り抜かれ、鋭敏な秘粘膜を虐められる。壊れそうなほどの虐悦に、マキナは喉を仰け反らせ悶絶した。

（くううっ……こ、こんな！ 敏感になりすぎて……激しすぎる……ううう！）

媚薬の影響で淫化した膣内は、怖いぐらいに感度を増してしまっていた。肉太の亀頭に子宮口を抉られるたび、甘い稲妻が駆け抜けて意識が飛びそうになってしまふ。子宮はじゅんじゅんと疼きを早め、抜き差しのたびに大量の恥蜜をしぶかせていた。

「すげえ濡れっぶりだな、感じてるんだろ？ 素直に言えよ、気持ちいいんだろうが！」  
「い、いやっ……いやよ。感じてなんて、き、気持ちよくなんて……な、ひいひいっ！」  
いやいやと首を振って拒絶するマキナだったが、激しく腰を使われればそれだけで言葉も返せなくなる。V字に開脚された両足は悦楽に震え、噴き出す愛蜜はインナーにまで染みを作ってしまった。

（だ、だめ！ 身体が敏感になりすぎて……い、嫌なのに、わたし……こ、こんな……！）  
感じている——気持ちいいと思ってしまうている。

口では否定しても、心までは否定できない。

必死で抵抗を続けるマキナだが、身体は加速度的に欲情してしまっていた。少しでも気を抜けば、一気に理性を持っていかれてしまいそうなほどだ。

（せ、せめて媚薬さえ解毒できれば。それまでは……た、耐えるしか、ない……っ！）

過去の陵辱で開発された肉体は忌まわしいほど敏感で、恥ずかしいぐらい快樂に従順だ。それでも、今までだつて強い意志で抑え込んできたのだ。今だつて蜘蛛怪人の陵辱に感じてしまつてはいるが、媚薬効果さえ解毒できれば、まだ抵抗できる——。

「はああ……そ、そうよ……今は耐えるの！ こ、こんなの何でもない、わたしの心は……ぜ、絶対、こんなの屈したりしない……いいっ！」

必死に唇を噛み、抵抗を続ける屈従の女神。僅かの勝機にかけ、勝ち目のない戦いを健気に続ける、その決意は悲愴でさえあつたが——戦いの趨勢は、残酷なまでに瞭然だつた。

「はあ、はあ、ああ！ あ……ぐ、ううう！」

緋色の長髪を辛そうに振り乱しながら、ギシギシと蜘蛛の巣を揺らし悶え狂うディバインハート。噴き出す汗と淫液を吸い込み変色してしまっているインナーズーツに、徐々に綻びが生じ始める。半透明のスキンズーツはタイト生地のように強度を失い、乱暴な陵辱に耐えきれずビリビリと伝線して破れ始めた。ズーツ内部で蒸れた汗の香りがむわっと香り、紅潮した肌が露わに晒されていく。

（！ そんな……ズーツが弱体化している。アークの出力が下がっているんだわ……！）  
変身ズーツのパワースーツは、創世の至宝ディバインアークだ。そしてそれを制御するのは、少女自身の意志力そのもの。だが、執拗な快楽責めで鬨り抜かれ、媚薬を注がれ強制的に発情させられ、さらに膣奥までもを激しいストロークで可愛がられ——気丈な態度に反し、マキナの意志は明らかに屈しつつあった。結果アークの出力は減衰し、目に見える形で少女の苦境を示すことになってしまったのだ。

「おや？ ご自慢の装備も随分弱ってきてるなあ。今ならこのアーマーも……キシシ！」  
「!! なっ……や、やめ……やめろ！」

執拗に腰を使いながらも、蜘蛛男はその変化を見逃さなかった。ズーツ越しに乳房をなぞっていた二本の腕をアーマーに伸ばし、そのままインナーごと胸部装甲を引き剥がす。

「あっ……や、い、いやっ！」

メギツ、ベリベリベリ！ 胸部を守る白銀の鎧が、呆気なく引き剥がされていく。パワ

ーを失ったボディスーツも無惨に引き裂かれ、汗に蒸れた両の裸乳がぷるんっ、と生まれ  
たまの姿で引きずり出された。

「あつ……や、いやっ！ 見るな……見ないで！」

咄嗟に胸を庇おうとする純情少女だが、両手は蜘蛛の巣に拘束されたまま。ギシギシと  
蜘蛛の巣が揺れ、剥き出しの乳房が振動で柔らかくに弾む。

「おお、思った通り良いチチしてやがるぜ。それに……キシュシユ！ 乳首までピンピン  
におつたてやがつて。しつかり感じてやがるじゃねえか！」

「つ……ち、違う！ 言うな……見るな……あ！」

恥辱に涙を滲ませ、ギリギリと奥歯を噛み締める純情少女。だが、実際に露呈した証拠  
は否定しようもない。スーツ内部で蒸れきり、芳しい汗香を放つ美巨乳の先端では、充血  
しきった勃起乳首がその発情ぶりをどうしようもなく見せつけているのだから。

「まだ口答えしやがるのか。仕方ねえなあ、少しきついお仕置きをくれてやるか！」

嗜虐的な笑みを浮かべ、スパイダースレイブは新たな糸を指先から放った。細く強靭な  
ワイヤーが、剥き出しの乳首にグルグルと巻きつけられる。

「っ!! な、何を……ひっ、くひいいいっ！」

ギチ、ギチッ！ 鋭敏な性感帯をきつく縛り上げられ、鋭い刺激が駆け巡る。さらには  
同様のワイヤーが陰核にも伸ばされ、包皮を剥かれた肉芽を幾重にも縛り上げられた。

「ひょうっ、く、クリトリスまで……痛う、ひ、んひいいいいいっ！」

コリコリにしこりきつた充血乳首に、包皮を剥かれた勃起豆。女体の中でもっとも敏感な神経塊を、三箇所同時に締め上げられて虐められる。痛みを伴う鋭悦に、さしもの気丈なヒロインも涙を零し悶絶した。

「キシュキシュキシュ、いい声で泣くじゃねえか。さすがの正義のヒロイン様もこいつはキツかっただろ。それじゃもつと泣かしてやるぜ、そら、そらそらア！」

「ひ!? いや、う、動かしちゃ……うああああ、あつあああああ〜！」

三つの急所に巻きつけた糸を、上下左右に思いつきり引つ張りまくられた。鋭敏極まる肉芽にワイヤーを食い込まされ、乱暴に四方へ引つ張られる。三点同時に、稲妻にも似た痛悦が連続して駆け巡った。

（ひ、の、伸びてる……乳首も、クリトリスもっ！ こんな……お豆、千切れちゃう！）  
充血しきつた硬豆を滅茶苦茶に引つ張られ、伸びきつた肉豆にワイヤーを食い込まされる。三つの急所を同時に虐められながら、膣奥には激しいピストンを繰り返されては、さしものデイベインハートも限界だ。

「ひいっ、ひい、ひいっ！ だめえっ、も、もうやめ……ひ、ぐ、うう！ び、敏感すぎるのに……これだめっ、これ、これだけはやめてええ〜！」

細頸を仰け反らせ、涙を零して絶叫する淫辱の天使。残酷無比な糸責めに、気丈な少女もついに泣きをいれてしまう。だが、敗残の天使が真に泣かされるのはこれからだ。

肉豆だけではなくさらに鋭敏な弱点にまで、蜘蛛男は自慢の責め糸を絡めつけてきた。



「くううう、ふ、ああ……うあ、あ、ああっ!!」

ビクン、ビクン！ 肉豆弄りと同時、休みなくピストンを続けていた蜘蛛ペニスが、大きく脈を打った。そして——プシャ、プシャアアア！

「ひっ!? な、何これ……うああ、あっああ〜!」

射精とは似て非なる感覚。膣内に放たれたモノは、性行為のための子種ではなかった。蜘蛛の腹部そっくりの亀頭から発射されたのは、少女を縛めている蜘蛛糸そのもの——強度と粘度を兼ね備えた糸が膣内狭しと大量に射出され、膣襞の隙間や肉壁の凹凸に絡みつき、性粘膜にまでビッチリと粘着させられる。

（うあ、な、何これ!? ネバネバしたのが絡みついて、お腹の中縛られて……きつい……!）  
精液を注がれるような重量感や刺激はない。だが膣襞一つ一つにまで糸を粘りつけられ、鋭敏な秘粘膜を縛り上げられる虐待は、今まで味わったことのないものだった。人間では絶対に不可能な異形の責めに、少女は四肢を震わせ感じ入る。

だが胎内糸責めの真価が発揮されるのはこれからだ。肉壁に無数の糸を食い込ませたまま、巨大なペニスが再びピストンを開始すれば——ミヂッ、ミヂミヂミヂミヂイ!

「ひいいい……ひ、ひいいい!! んぎ、んぎいいいいい!!」

瞬間、無数に胎内を駆ける虐待の嵐に、マキナは喉を仰げ反らせ悶絶した。

肉棒が押し込まれるたび、糸で縛られた膣襞が奥に向けて引っ張られ、引き抜かれれば逆方向に引きずり出され伸ばされる。ズボズボと素早くピストンされれば、奥に手前に休

む間もなくかき乱され、糸が食い込んで凄まじい虐痛が連続した。粘膜そのものを滅茶苦茶にかき混ぜられ、ランダムに引つ張りまわされて膣壁すべてを同時に可愛がられる。その想像を絶する快感たるや――。

「だ、だめ……だめ、これだめええ！ お、お腹引つ張られる……動かさないで、中が、中が滅茶苦茶になつて……ひいいい、ひつぎいいいいい！」

緋色の髪を振り乱し、舌を突き出し悶絶する被虐の女神。挿入だけでも耐えがたいほどだったのに、さらに膣壁を引つ張りまわされる魔悦まで加えられたのだ。ピストンのたびに肉穴を穿られる快感と、性粘膜を引きずりまわされる残酷な痛みが混ざりあい、えも言われぬ虐悦となつて膣内を駆け巡る。悶絶のたびにゆさゆさと蜘蛛の巣が振動し、乳首と肉芽に糸が食い込んでさらなる痛悦に追い詰められた。

「ひいっだめえ、こ、こんな……あああつ乳首伸びるう、お豆も食い込んで……おなか、お腹引つ張られるの……ひいいやめてえ、こ、これもう許しつ……も、許してえ〜！」

「キシキシ、ようやく素直になつたなあ。それじゃ、もつと感じさせてやるよ！」

想像を絶する快楽に耐えきれず、気丈な戦士もついに許しを乞うてしまう。強情だった少女の惨めな哀願っぷりに征服欲を刺激され、蜘蛛男はさらに陵辱を加速させた。ギシギシと蜘蛛の巣を揺らしながら腰使いを加速させ、糸を繰りながら四本の腕でDカップの両乳房を鷲掴みにし、容赦なく揉みしだく。

「んはああ、む、むね……ひう、くううっ！ だめっ、い、今は敏感すぎるのに……ああ

つ卑怯よ。そんなにたくさんの手で、おっぱい両方一緒に揉むなんて卑怯よお〜！」

むにゅ、むにゅ、にゅむにゅむにゅむ！ 四本の腕が同時に、そしてそれぞれ別個に動き、縦横無尽に少女の乳房を責めまくる。根元から搾り上げられながらDカップの巨乳を揉みまくられ、乱暴に搾乳されながら指先だけで優しく乳肌をなぞられる。さらには勃起乳首を親指と人差し指で摘み込まれ、コリコリとすり潰されながら糸でも引つ張られ、泣きたくなるほどの乳悦で追い詰められた。

「んああ、し、しつこい……ち、乳首シゴきながら揉むのズルい、搾りながら擦るのもズルい……こ、こんなの卑怯、おっぱい揉みながらズブズブするの卑怯すぎるわよお〜！」

先程の尻責めでもたつぷりと味わわされた、副腕だからこそ可能な巧みすぎるコンビネーション。媚薬で蕩けそうな胸乳を数多の手法で休む間もなく可愛がられ、同時に激しいストロークで膣奥までを責め抜かれる。あまりに快美すぎる快楽責めに、デイバインハートは涎を吹き零し悶えまくった。

「キシシ！ どうだ気持ちいいだろうが……素直に言えよ。おっぱい滅茶苦茶に揉まれながらズボズボされるの、気持ちいいですって言ってみるよ！」

「ひいい、い、いやあ……そんなの言えないっ、気持ちいいなんて言いたくないっ！ お、おっぱい揉まれながらズボズボされるのなんて……ひいい、す、すごい……いい〜！」

イヤイヤと首を振って拒絶するも、湧き上がる快感を否定しきることなどできるはずもない。無数の手で揉まれ抓られさすられ可愛がられ、蕩けそうなほどに感じてしまう両の

乳峰。ズボズボと子宮奥まで突き上げられる満足感に、ストロークのたびに滅茶苦茶に粘膜を引っ張られる被虐の辱悦。媚薬に侵された肉体は苦痛にも快楽にも同じように従順で、一秒ごとにマゾヒスティックな悦びが倍加する。このままでは、もう——！

(ダ、ダメ……ダメえ！ こ、こんなの続けられたら、わたし、もう、もう……！)

ゾクゾクと駆け巡る、逃れえぬ敗北の予感。

悔しいのに、負けたくないのに、こんなの嫌なのに、湧き上がる絶頂感が抑えられない。疼く子宮からは恥蜜が溢れ続け、膣痙攣が止まらない。

「んはああ、だ、だめ……だめえ！ こんなぁ……わたし、も、もう……イッ……！」

「キシシ、いいぜ。イクときはしつかりイクって言うんだぜ……おら、わかったかあ？」

ねつとりと濃厚な愛蜜を人差し指で掬われ、顔面にヌルヌルと塗りつけられながら命令される。羞恥と屈辱に美貌を真っ赤に染め上げながら、マキナはそれでもイヤイヤと長髪を振り乱して拒絶する。

「い、いやっ……言わない、イカない……負けたくないっ！ わたし、こ、こんなので絶対イカされたりなんてっ……んはああ、あむ、んむうっ！」

ズブ、ニヂユツ！ 必死で叫んだ瞬間、愛液に濡れた指先を唇へ押し込まれた。そのままジュボジュボと抜き差しされ、お口の中まで蹂躪される。

「最後まで生意気な野郎だぜ。限界なんだろ、素直になれよ。おら、おらおらあ！」

「んむうっ……んちゅ、んむっ！ いや……イ、イカない、負けたくない……んんうっ！」



すべての力を振り絞った、満身創痍の状態。アークの加護も鎧の防御もないままに猛烈な攻撃を叩き込まれ、ディバインハートは無惨に空中から叩き落とされた。背中から地面に叩きつけられた衝撃で、辛うじて形状を保っていた鎧もその殆どが砕け散る。ビリビリに破れたインナー一枚纏っただけの姿で、敗北のヒロインは惨めに地面に這い蹲らされた。「きやはははは！ 好い様ねお姉ちゃん！」

「あうつ、ぐ！ あ、アリア……あぐううう！」

ガシッ！ それでも必死で起き上がろうとしたところで、降りてきた悪魔に思いきり肘関節を踏みつけられた。体重を乗せた硬質なブーツでグリグリと踏み躪られ、ベキベキと何かが砕ける音が木霊する。凄まじい苦痛に、マキナは喉を仰げ反らせ絶叫した。

「ああっ……ぐ、ぐあああああ！」

「んふふふ、いい感触。こりや関節までイっちゃったカナ？ ま、改造人間にとつてはこのぐらいどうってことないんだケドさあ……クフフフ！」

残酷な笑みを浮かべ、姉を踏みしだく魔少女。赤い眼光は、危険な欲情に濡れていた。

「そうよ……わたしたちはこのぐらいじゃ楽になれない、死なない壊れない解放されない！ 教えてあげるわお姉ちゃん……わたしがどれだけ酷いことされたのか、その身体の隅々までたっぷりとねえ！」

「ア、アリア……貴方はどこまで……ああっ!!」

絶体絶命の状況でも、あくまで妹を気遣うマキナ。そんな姉を悠然と見下ろしながら、

悪魔の少女はゆっくりと身体を重ねていった。長身の姉を馬乗りになって押さえ込むと、剥き出しの乳房に手を伸ばす。

「なっ……アリア!? や、な、何を……」

「あれえ、言わなくてもわかってるでしょ？ お姉ちゃんだってわたしと同じことされてただからさあ！」

「……っ。ま、まさか……!!」

焦る姉を見下ろし、淫蕩な笑みを浮かべる魔少女。生々しい欲情を突きつけられ、マキナは息を飲んだ。

「覚悟してよね。泣いても叫んでも許さない……滅茶苦茶に犯して壊してあげるから！」  
蛇のように舌舐めずりし、熱い吐息を漏らす。赤く輝く瞳に宿るのは、脳改造されたスレイブノイドと同様の、獣欲に支配された欲望だけだ。

（っ……あ、亜里亜。やつぱり、もう……!!）

戦いの中で見せる冷徹さと残酷性、そして獲物に向けられる欲望と肉情。デモニックアークに支配された今の亜里亜は、人の尊厳を捨てた獣も同然だ。

（あぁっ、アリア。こんなの、酷すぎるわ……!!）

残酷すぎる運命に、心が引き裂かれそうになる。

血を分けた姉妹は今や最悪の敵同士、そして勝敗はもはや決定的。魔に堕ちた少女は憎悪と欲望の命ずるまま、かつて愛した姉を齧っていく。

「ふふ、いいわね〜お姉ちゃんは。綺麗でカッコよくて、おっぱいもこんなに大きくなって羨ましいなあ、ムカつくから滅茶苦茶に虐めちゃおっと!」

最初に目をつけられたのは、やはりもともと目を引く女の部分——未発達な妹のそれと違い、豊かに熟れきったDカップの乳房だ。スーツの裂け目から覗く乳肌は戦闘の疲労でじつとりと汗ばみ、艶めかしく色みを増している。荒い呼吸のたび大きく揺れる美巨乳を、アリアはゆっくりと揉みしだしていく。

「はうっ! く、あ! や、やめてアリア……くう! こ、こんなの……おかしい……!」

(そうよ、おかしいわ。こんな、女同士で……姉妹で、こ、こんなことするなんて……)

同性、それも血を分けた姉妹で肉体を重ねあうなんて、あまりに異常すぎる。生真面目な少女は背徳感に悶えながら、なんとか妹を拒絶しようとする。

「相変わらず真面目だなあお姉ちゃんは。どうせ抵抗しても無駄なんだから楽しんでほうがいいのに……知ってるんだよ、おっぱい弱いんでしょ?」

「なっ?! そ、そんなことない……ん、くうっ!」

ぎゅ、むにゅっ。真上から体重をかけられて両乳房を押し潰され、五指を埋められて揉み込まれた。かつての調教で開発された豊富な巨乳は、麻希奈の弱点の一つだ。アーマーどころかスキンスーツさえ失い、何の防御もない剥き身の急所を両方一緒に強く揉まれ、思わず甘い喘ぎが漏れてしまう。

「ふっ……く、うう。や、やめてアリア、くう、や、やめなさ……いっ!」



戦闘で火照った乳肌に、グラブの冷たさが心地良い。喘ぎ混じりながらも必死で拒絶するマキナだったが、陵辱の手をはね除ける力は残されていなかった。なんとか身体をくねらせて抵抗だけは示すものの、執拗な責めから逃れることなどできはしない。

「やめないよお姉ちゃん。言つたでしよ、滅茶苦茶にしてあげるつて。ほおら、次は……」  
「くふあつ……や、そ、そこ！ ひああ、乳首……んんっつ！」

反応して勃起した乳首の先端に人差し指を宛てがわれ、鋭い爪を立てられてクリクリと弄り回された。駆け巡る切ない稲妻に、四肢を痙攣させ感じ入る敗北の女神。肉親同士で淫らな行為に耽っているという背徳感が、いけない快感をいつそう高めていく。

「ああっ、お姉ちゃんを好き放題虐められるなんて夢みたい。今度はこれでどう!？」  
禁断の愉悅に高ぶっているのは陵辱者も同じだった。嗜虐心の赴くまま、指使いをいつそう激しくするデモニックギア。乳頭を弄り回していた悪魔の爪に力が込められ、そのまま乳首へと突き入れられた。

「ひ、ち、乳首……ひぎ、ぐあああっ！」

ズブ、ズブズブ！ 鋭い鉤爪を乳首に突き立てられ、そのまま乳首全体を潰されながらシゴかれる。駆け巡る虐痛に、少女の身体が大きく仰け反った。

「ふふ、苦痛に悶えるお姉ちゃんの表情とつてもステキ！ ほおらもつと泣け、喚<sup>わめ</sup>けえ！」  
「ひうっ……ぐ、ああっ！ 痛あ……あああ！」

鎧を容易く引き裂くほどの凶器で、剥き出しの性感帯を容赦なく責め立てられる。残酷

な乳首責めの激痛に、喉を仰け反らせ絶叫する敗北のヒロイン。人差し指を乳頭に突き刺され、そのまま抜き差しされて乳腺までを虐め抜かれ、涙混じりの絶叫が止められない。

「ひい、あ、ああっ！ や、やめてアリア……くうう！ 乳首壊れ……ひ、ぎいい！」

髪を振り乱して身悶えるたび、Dカップの巨乳がぶるんぶるんと揺れ躍る。豊満さを見せつけるかのような淫乳に、陵辱者は嫉妬混じりの視線を送った。

「あームカつくなあ、大きなおっぱい見せつけて……でもこれももうアリアの玩具なんだよね、やりたい放題なんだよねえクフフ！」

面白半分にかエルを握り潰す子供の残虐さで、無邪気に微笑む幼き悪魔。人差し指での乳腺ピストンは続けながら、掌全体で巨乳を覆うようにしながら強く揉み込んでいく。

「や……お、おっぱいまで……はあん、くうん！」

むにゅ、むにゅ、にゅむり。柔らかな乳肌にメタリックなグラブを食い込まされ、真上から押し潰すようにしながら揉みまくられる。乳首での痛みとのギャップで余計に快感が際立ち、甘い喘ぎを零してしまう。

「わあ、柔らかあい。組織の男どもが夢中になるわけだ……その上感度もすごいなんてとんでもない淫乱おっぱいだね、恥ずかしくないのお姉ちゃん？」

「い、いやっ……い、言わないでアリア……んはあ、も、揉むの強すぎ……いいい！」

苦痛混じりの乳首虐めで被虐の性を煽られながら、いやらしい詰問きつもんで羞恥心までもを刺激され、官能を否応なく高ぶらされる。同時に優しく乳房を揉みしだかれて、甘い乳悦に

追い詰められた。妹の指に弄ばれるたび、抑えきれず喘ぎが漏れてしまう。

(ど、どうして？　こんな……たったこれだけで、こんなに感じてしまうなんて……)

嫉妬心ゆえの執拗さに、憎悪を剥き出しにした残酷性。アリアの責めは確かに苛烈なものだったが、行為自体は単純な愛撫にすぎない。いくら弱いと言っても、乳房だけでこんなにも感じさせられてしまうなんて、あまりにも異常だった。

「逆らえないでしょ？　お姉ちゃんのデータは全部インプットしてあるからね、どこが弱いのか、どうすれば感じちゃうか、全部わかっているんだから」

困惑する姉を見下ろし、勝ち誇った笑みを浮かべる。赤い瞳は、狡猾に輝いていた。

誘拐されて以来、麻希奈は組織の構成員たちの慰み者とされてきた。恥辱の記録はデータ化され、デモニックギアにインプットされている。マキナの性的弱点は、すべてアリアに見透かされているのだ。

「なっ……そ、そんな。いやっ……う、嘘……！」

(そんな……わ、わたしの恥ずかしいところ、全部、亜里亜に知られてしまったなんて！) 記憶から消し去りたいほどの痴態の数々を、すべて妹に知られている。シヨックにも似たたまらない恥ずかしさに、顔を赤らめる純情少女。背けられた視線を執拗に追い、アリアは満面の笑みで囁く。

「ううん、嘘じゃないよ。お姉ちゃん美人だから大変だったよね、毎日毎日何十人の男たちに犯されて。でもさ、最初は抵抗してもすぐに快楽慣れして、何度も何度も簡単にイ

カされちゃって。どんどん淫乱な身体になっていったよね〜♪」

「！ い、いや……言わないで。そ、そんな……」

忘れたくても忘れられない淫辱の記憶を、実の妹に穿り返される。たまらない恥辱と背徳感に、マキナは顔を真っ赤にして恥じ入った。

「クールでカッコイイのに、責められると弱くてさ。こうして乳首弄られながらおっぱい揉まれると……メロメロに蕩けてスイッチ入っちゃうんでしょ変態マゾヒロインさん！」

凜々しかった姉が狼狽する姿が楽しくて、アリアは容赦なく責め手を加速させていく。人差し指と親指とでコリコリと乳首をシゴきながら、おっぱい全体を潰すように捏ね回す

——マキナが一番感じてしまう、一番弱い乳責めだ。

「はあっ、だ、だめえ！ そ、それダメ、乳首とおっぱい一緒は……ふあ、あああつ！」

たまらない乳悦に、喉を仰げ反らせ喘ぎ悶える淫乱ヒロイン。いつも気丈だった姉は、幼い妹に呆気なく手玉に取られていた。

「本当に敏感なんだねお姉ちゃんって。このままおっぱいだけでイカせちゃおっかなあ？」  
「くっ……そ、そんな。やめてアリア……お、おっぱいだけでなんて……ああ——っ！」

ちゅ、ちゅっ。勃起しきつた乳首にいやらしくキスを浴びせられ、優しく啄つばまれた。これまで残虐に痛めつけられていた反動で、純粹な快感がたまらない。しなやかな美脚を痺させ、マキナは甘い乳悦に身悶えた。

「ふふっ、本当におっぱい弱いんだね。いいわあ、お姉ちゃんの淫乱おっぱい、このまま



DIVINE  
01

アリアのものにしてあげる……ちゅ、んちゅ、じゅるるるっ」

「あ、ああっ！ らめ、乳首そんなに吸っちゃ……んくううっだめなのお、キ、キスしながらおっぱい揉むのだめだめ感じすぎちゃううう〜！」

長髪を振り乱し、狂いそうなほどの乳悦に悶え狂う変身ヒロイン。たつぷりと唾液を塗り込まれ、傷口を労るいたわように舌先で舐められるのが心地良くてたまらない。感じ始めたころでおっぱい全体を揉み込まれ、乳房全体が溶けそうなほど感じてしまう。

自身の欲望を充足させるために行う男の陵辱とはまるで違う。快感で屈服させることだけが目的の、同性だからこそできるねちっこい快樂責め。快感だけが際立って、どこにも抵抗のチャンスがない。

（ぜ、全然逆らえない。このままじゃ、本当におっぱいだけでイカされちゃうわ……！）  
ゾクゾクと駆け巡る、絶頂への予感が止められない。子宮は痛いほどに軋みまくり、股間を守るインナーはべっとり愛液を吸って変色していた。

「うああ……イク！ おっぱいだけでイカされちゃう、ア、アリアにイカされ……っ？」  
もう限界だ——意識が消えそうになった瞬間、しかし悪魔の少女は狡猾にも責め手を止めていた。

「えっ……あ、は。はあ、はあ、はあ……」  
（うっ……ど、どうして？ どうしてやめ……）

荒く息をつきながら、涙に潤む目で陵辱者を見上げる。少女の心に去来するのは、責め

が中断された安堵ではなかった。

「物欲しそうな目しちやって。本当はイカせて欲しかったんでしょ、やうらしく！」  
「……あつ……そ、そんな……遠……！」

恥ずかしすぎる指摘に、耳まで赤く染めて恥じらう純情少女。だが細かい拒絶の言葉とは正反対に、肉体の反応は雄弁だった。快楽に従順な女体はこれまでの愛撫でたつぷりと蕩け、見るもあさましく発情しきってしまったている。大好きなやり方でたつぷりと可愛がられた淫乳は大きく揺れまくり、桜色の乳首を切なげに勃起させて快楽に打ち震えていた。愛液にまみれた下着越しには、物欲しげにヒクつく秘唇の赤さが透けてしまっている。

「ククク、こんなに濡らしちやって、何が違うって言うのよ。わたし全部知ってるんだよ、お姉ちゃんがどれだけ変態で淫乱なのか。例えば……ほらあ」

「はあ、はあ、はあ……あ。や……な、何を……」

生殺しの胸は残酷にも放置し、アリアは馬乗りのまま上体を倒し唇同士を至近させた。困惑する姉に對しいやらしく舌舐めずりすると、アリアは強引に姉の唇を奪った。

「うむう……う、ううっ?! や、アリア……な、何を……んむ、ん、ちゅっ！」

（そ、そんな……キスなんて。女の子同士で……姉妹同士でキスなんて!!）

予想だにしていなかった行為にマキナは驚愕した。咄嗟に顔を背けキスから逃げようとするも、それ以上の速さで唇を押しつけられ逃がしてくれない。

「逃がさないよお姉ちゃん……ほらあ。んむ、んちゅ、くちゅる……じゅちゅ」

男たちの視線から感じる、異様な欲情と熱気。自分に注がれている淫らな期待を感じ取り、思わず生唾が溢れ出す。男たちを見上げる潤んだ瞳は、膨らんだズボンのテントを交互に追ってしまっていた。

「黙っても伝わらないでしょ。して欲しかったら自分からおねだりしなきゃ。ね？」

「あ……そ、そんな。おねだり、なんて……」

反射的に拒絶するものの、その言葉にいつもの気迫はない。完全屈服回路の支配下にある麻希奈は、もはや誰にも逆らうことなどできないのだ。

「……………あ、あの。み、皆さん……………そ、その……………」

沈黙していられたのは、ほんの数秒程度。犬のような四つん這いのポーズのまま上目遣いに男子たちの機嫌を窺い、ゆつくりと言葉を吐き出していく。

「だ、誰でもいい……………誰でも、いいですから、ああ、わたしを……………わ、わたしを……………」

（！　な、何を言っているの……………こんなことしている場合じゃないのに……………こんな……………！）

妹の心を奪われ、大切な友人は生命まで奪われた。

絶望、悲哀、復讐、義憤——湧き上がる感情。

ミレニアムの凶行を、これ以上許すわけにはいかない。

そう。自分がすべきことは、こんなことじゃないとわかっているのに——でも。

「し、して……………してください！　お、お願いします、わたしを……………貴方の奴隷にして……………」

（ああっ……………い、いや。言いたくない、こんなの本当のわたしじゃない。で、でも……………！）



渴く喉から勝手に発せられるのは、本当なら死んでも言わない隷属の言葉。でもそれを口にすると、ゾクゾクと被虐の心が疼いてたまらない。

（ああ……だめ！ わたし、もう、もう……！）

切ないくらい胸が疼いて、痛いくらい下腹が軋んで。媚びることしか知らない哀れな子犬のようにお尻を揺すりながら、麻希奈は墮落の言葉を口走る。

「わ、わたしを犯して……滅茶苦茶にして！ わたしのご主人様になって……わたしを隷として飼ってください、肉便器として愛してくださいいい！」

（あ、ああ。わたし……な、なんてことを……！）

たまらない羞恥、死にそうなほどの屈辱。泣きたくなるぐらいの惨めさ。だがそれ以上に心を満たす、マゾヒスティックな倒錯感——完全に屈服しきった身体は心からの奴隷宣言と同時に軽い絶頂に達し、熱い恥蜜を太ももから零してしまっていた。

「お、おい。これって……」「ああ。来須麻希奈……ヤッチまつても、いいんだよな？」

犬のように這い蹲ったまま、潤んだ瞳で男たちを見上げる淫乱少女。あまりに異様な状況に、男たちも半ば理性を失っていた。

「うん、そうだよ。こいつは平和を脅かすテロリストで、その上犯されて喜ぶ変態マゾの肉便器だから……みんな、滅茶苦茶にお仕置きしてあげてよ！」

危うい空気を言葉巧みに誘導する亜里亜。邪悪な願望に応え、デモニックアークが妖しい輝きを放つ。破滅の魔力が周囲に広がり、観衆に残されていた僅かな理性を根こそぎ破

壊し獣へと変えていく。

「そ、そうか。それじゃ……へ、へへへ！」

瞳を血走らせた男子生徒が、我先にといきり立ったペニスを取り出した。呆然としていた少女の眼前に、先走りに濡れた勃起肉が突きつけられる。

「うあつ……ご、ごく。お、おちんちん……こ、こんなに大きくなって……はあ、ああ」

拒絶も否定もできない、しようとも思わない。目の前に突き出されたそれがどうしようもなく愛おしくて、だらしなく舌を突き出して喘いでしまう。

「お前が授業中に喘いでたせいで、ずっとこんなだぜ。責任とれよ。おら、しゃぶれよ！」

「はああ……は、はいっ。しゃぶります……ご主人様のご命令……ああ、嬉しい……っ！」  
恥ずかしさや屈辱よりも、命令してもらえるのが何よりも嬉しい。堕ちた肉奴は瞳を潤ませながら、涎まみれの唇で男の肉棒にしゃぶりついた。

「はあ……あむ。んむ……はあ、んむ……っ！」

（わたし、なんてことしてるの!! こんな……自分からするなんて……で、でも……!）  
自分の行為が信じられない。自分がすべきことはこんなことでは決してない、そうわかっているのに――。

「お、おいし……はむ、れろ。お、おつきくて……はあ、太いの……おいひい……!」

（ああ。だめえ。奉仕すると心が蕩けてしまって……嬉しくて嬉しくて、止められない!）  
人としての理性を凌駕する、奴隷としての本能。奴隷としてご主人様にご奉仕できるの

が嬉しくて、喜悅の涙がポロポロと零れてしまう。

「何だ、チンポしゃぶるのが泣くほど嬉しいのかよ。どんだけ最低の変態なんだよ！」

「ああ……は、はい……んちゅ。お、おちんちんしゃぶるの……泣くほど嬉しいれふ……」  
友人の死に流したもののより、ずっと多くの涙が溢れてくる。愛を囁かれながらのキスよりも、奴隷として口穴を犯されるほうが、ずっと気持ちよかった。

（ああ……そ、そんな。わたし、も、もう……!）

「はあ……あ、あむつ、んむ！ はあ……れろ、れろ。んちゅ、うう。んむ、んん！」

懊悩する心などもはや関係なく、身体が勝手に動いてしまう。膝立ちになって上体を起こすと、麻希奈は黒髪を揺らしながら激しく頭を前後させた。

「はむう……ん、んちゅ！ じゆる、ん、んむ！」

喉奥にまで飲み込んで口壺全体で締め上げる、食道全体を性器に見立てた下劣極まる口辱奉仕——組織で仕込まれた忌むべき淫技を、麻希奈は全身全霊を込めて披露する。

「うお、すげえ！ 口全体で搾られるみたいで……くう、こいつのフェラ上手すぎるぜ！」

「あはあ……あ、ありがとうございます……んむ、んちゅ！ わたしのお口……はむ、んむ。楽しんでただけて、こ、光栄です……じゆるるるっ！」

（ああ、どうして……こ、こんなに心がざわめくの。こんな……し、幸せなの……!?!）

奴隷として認めていただけるとまらない満足感。一人の人間として誰かと心通わせることよりも、何倍もの安らぎと幸福を感じる。嬉しくて嬉しくて、麻希奈はむせび泣きなが

ら口唇奉仕を加速させた。

「はむ……んちゅ、れる。んちゅ、じゆるる……ちゅば、れる。んちゅ……ぢゆるる！」

口壺全体での奉仕に加え、激しく舌を使って亀頭部分をしゃぶりまくる。すぼめた舌先でクリクリと鈴口を刺激し、溢れた先走りを思いっきり吸い上げて搾り上げる。可憐な少女のものとは思えない、商売女顔負けの淫乱テクニクに、年頃の男子生徒が耐えきれずもなかつた。

「うおお、我慢できねえ！ もう出ちまうぜ……口マンコに出してやるぜ淫乱奴隷め！」

「んじゅ……は、はいっ！ 出して、わたしのお口オマンコにして……あは、あつあ〜！」

ドビュッ、ドビュドビュドビュ！ 逞しい脈動と共に、大量のザーメンが勢いよく噴出した。注がれたミルクを、麻希奈は喉を鳴らして飲み干していく。

「んぐ……ごく、んむうう！ はあ、で、出てる……ごく、ごく！ あはあ、お、おいしいです……口マンコに出されるの、さ、最高です……んちゅ！」

（ああ、美味しい。男の人の……おちんちんのミルク。た、たまらないわ……！）

性器同然に改造されたお口に注ぎ込まれた、決定的な隷属の証。完全屈服回路に支配された少女は、もはや心でも抵抗することはできなくなっていた。

「お、お……良かったぜ来須……へへ」

「あ、ありがとうございます。んちゅ……じゆる」

射精ベニス引き抜かれ、溢れ出した精液の残滓に美貌を白く汚される。奉仕が終わっ

た後も顔面に付着した精液を舌を伸ばして意地汚くねぶり、唇から漏れ出した白濁も細指に絡めて舐めしゃぶる。普段のクールな振る舞いからは考えられない淫猥な痴態は、男たちの欲情をさらに煽り立てた。

「うっ……す、すげえ。来須……エロすぎだぜ」

「あ、ああ……俺、もう我慢できねえ！」

いきり立った生徒たちが、次々に男性器を取り出して少女に挑みかかる。人としての理性を失い欲望に流されたその姿は、正しく淫獣そのものだ。

「そうよお、我慢する必要なんてないの。欲望のままにその女を犯すといいわ、あはは！」  
理性を失った獣たちを、言葉巧みに誘導する。邪悪な妹の言葉も、もはや麻希奈には届いていなかった。

（ああ……みんな、わたしを求めてる。わたしを犯してくれる……ご主人様なんだわ！）  
本来なら何よりも忌み嫌っていた、人の誇りを捨てた獣としての振る舞い。だが今では、彼らに対して敬意さえ覚えてしまう。たまらない期待感にゾクゾクと胸が高まり、股間で愛蜜が糸を引いた。

「おい、上に跨がれよ。自分から腰振ってチンポしごくんだ……できるよなあ肉奴隷？」  
床に寝そべってペニスを真上に突き出し、傲慢に命じる男子学生。どんなに自分勝手な命令にも、完全屈服回路に支配された奴隷は絶対服従だ。

「あっ……は、はい！ わかりましたっ……し、します。わたしから跨がって……ご、ご

主人様のおちんちん、肉便器マンコでシゴかせていただきます！」

精液の残滓をしゃぶるのをやめ、瞳を輝かせて命令に従う。愛液でぐちゃぐちゃになっている下着をいそいそと脱ぎ捨て、男子の上に馬乗りになった。

「そ、それじゃいきますね……お、おちんちんじゅぶーって……はあ、んんん！」

じゅぶ……ぐじゅ、じゅぶぶぶぶ！ アネモネスレイブに何度も何度もイカされまくり、たつぷりと絶頂愛蜜を湛えたままの濡肉壺が、真上から少年の剛直を飲み込んでいく。

「はあああ……んんっ！ おつき……か、かたあい。あああ、す、す……い、イイツ！」

貪婪な蜜壺は根元まですべてを受け入れ、少女の腰と男子の腰が完全に密着する。敏感すぎる肉体はそれだけでも軽く絶頂してしまい、収縮する膣が肉棒を締めつけていた。

「あはあ……い、いっちゃいました……ああ。い、入れただけで……あはあ、ああん！」

「へへ、もうイキやがったのかよ。だけど休む暇あねえぞ淫売、そのまま動くんだ……思いつきり腰振って、その淫乱マンコで俺様を楽しませろ！」

「ふああ、は、はい……はいっ！ い、いったままですけど……ひう、くううんっ！動きまます……いったままの淫乱マンコで……ご奉仕しますうう！」

完全屈服の奴隷に、逆らう権利などない。絶頂直後でキュンキュンと軋み、辛いぐらいに感度を増している肉壺を使い、命令通りに男への奉仕を続ける。激しく腰を振りまくり、騎乗位のまま男性器を貪りまくる。

「あ、あああっ！ すごっ……お、奥まで当たってる……くう、くううん！ こ、この格

好でズボズボするのいい……腰が、と、とまらないのおろし！」

腰と腰を密着させての挿入は、膣内の最奥にまでペニスが入り込んでくる。激しく身体を揺すれば硬い亀頭がコッソコッソと子宮に当たり、素早く腰を使えば性粘膜を磨かれる感覚がたまらない。奴隷として奉仕しながら、自分自身のペースで肉棒を好きなように貪り食らう——ただ力任せに犯される陵辱とはまた違った快感に、麻希奈は夢中だった。

「ああああ……じ、自分で腰振るのいい、奥まで当たってすぐくイイっ！　で、でももっと欲しいの……お願いもつと、もつとわたしを犯してえろ！」

あさましいアへ顔を晒しながら、黒髪を振り乱して悶え狂う淫乱少女。だが、完全屈辱回路の影響下に堕ちた女体は、この程度ではまるで満足できない。涙を流して悶え狂いながら、いつそうの寵愛をねだる牝豚奴隷。破廉恥極まるおねだりに応えてくれる『ご主人様』は、他にもいくらでもいる。

「ああいいぜ！　犯してやるぜ肉便器……おら、感謝しながらしゃぶるんだぜ！」

「ぼ、僕も。本当は僕麻希奈さんのことずっと気になってたんだよ、夢みたいだなあ！」

新たな男子たちが『ご主人様』として名乗りを上げる。麻希奈は彼らの顔を確認するとすらすらと、左右から突き出された肉棒をそれぞれ手にとった。

「あああ……ありがとうございますご主人様。精一杯に尽くします……ちゅ、んちゅ！」

忠誠を誓うように、それぞれの亀頭にちゅちゅと軽くキスをする。悦びに瞳を潤ませながら一本は口を含み、もう一本は右手で掴んでシゴキ始めた。

「あむ、んちゅっ！ はあ……こ、今度のもおつきい……お、おいしいれふ……ん！」

性器同然の感度へと改造された口穴で感じる、逞しい雄の脈動。掌の中でビクビクと蠢く男根の反応が嬉しくて、指での奉仕も加速する。キュンキュンと蠢く膣は搾り上げるように肉棒を締めつけ、その状態で腰を振れば脳天にまで快感が駆け巡った。

「い、いいっ……はむ、んむ、んちゅっ！ お口も、お手々も、おまんこも……あああもつもつとしてえ、みんなあ、も、もつとわたしを犯してえ〜！」

意地汚く三本のペニスを貪りながら、それでも満足できずにさらなる寵愛をねだる。ご奉仕を続けながら開いている左手でいそいそとブラジャーのホックを外し、熱く疼く乳房を曝け出した。窮屈な締めつけから解放され、汗にまみれた発情巨乳がぶるん、と震えてまろびでる。柔媚そのもののおっぱいは激しく腰を振るたびぶるんぶるんと揺れまくり、桜色の乳首を勃起させてさらなる寵愛をねだっていた。

「まだ足りねえのかよ、ド淫乱が。それじゃそのやらしい胸でもしてもらおうか！」

「あつ……は、はい！ ありがとうございます……んちゅ、ちゅむ。お、お望み通りおっぱいでします……麻希奈のおっぱい、犯してください！」

胸での奉仕のやり方も、当然組織で経験済みだ。優しいご主人様に感謝して、差し出されたペニスを掴み込む麻希奈。ぶるんつと巨乳を揺らして谷間に挟み込み、左乳を自らの手で揉み込むようにしながら動かして、懸命の乳奉仕を開始する。

「はあ、はあ、あ、ああ！ お、おっぱい熱い……おちんちん、おっぱいの中で熱くなっ



て……パイズリご奉仕、き、気持ちいいですうう〜！」

むにゅ。にゅむ、むにゅっ。自らの手で揉み込まれ、豊満な乳房が柔らかく形を変える。きつく乳肌食い込んだ肉棒から伝わってくる温度と硬さ、自らの手で揉みほぐすことによつて得られる甘い乳悦。奉仕している側にもかかわらずたまらない快感を覚え、淫乱奴隷はおっぱいを揺すりたくつて身悶えた。

「おっぱい弱いんだね〜来須さん。それじゃこっちも虐めてあげるね……ほら、ほら！」  
騎乗位で腰を振るたびブルンブルンと揺れまくる右乳房に、男の一人が勃起ペニスを突き出した。柔らかくに熟れきつた乳肉に力任せに亀頭を押し込み、そのまま激しく腰を使つておっぱいを虐めまくる。

「おほ、こりやすごいや！ 柔らかくて汗でムレムレで……僕のペニスに吸いついてくる。へへ、来須さんのおっぱいってまるでオマンコみたいだね！」

発情しきつた淫肉は、突かれるたび柔媚に形を変えて男根を押し包む。性器さながらに改造された乳房の味わいに興奮し、男は激しく腰を突き出して柔乳肉を抉りまくってきた。「うああ、お、おっぱいまでおちんちんズブズブ……これすごい、麻希奈のおっぱい、オマンコみたいに犯していただいて嬉しいです気持ちいいですありがとうございますう〜！」

欲望を満たすために女の身体を道具のように扱う、本来なら絶対に許せない下劣な行為だ。だが今の麻希奈にとっては、肉便器扱いされることは何よりも光栄なことなのだ。

お願いしてもいないのに自分を虐めてくれる優しいご主人様に感謝しながら、淫乱奴隷は涙を流して乱れ狂った。

「激しくされたほうが感じるってか。だったらほれ、俺も滅茶苦茶にしてやるよ！」

騎乗位で繋がっている男子が、突如激しく自ら腰を使い出した。自分のペースで楽しんでいたところに何倍もの逞しきでピストンを見舞われ、狂いそうな虐待が連続する。

「ひっ、だ、だめ……だめええ！ いきなり激しすぎですご主人さまあ、そ、そんなに激しく虐められたらっ……んむう、んぶうううっ!？」

ズボ、ズボ、ズボズボズボズボ！ 真下からの突き上げに激しく身体を震わせながら、悩ましい声で喘ぎ乱れる牝奴隷。振り乱された黒髪を乱暴に掴まれ、そのまま激しく頭を前後させられて肉棒を喉奥にまで突き刺された。

「激しくされたほうがいいんだろ。おら、奴隷女の口マンコ滅茶苦茶に犯してやるぜ！」

「ぼ、僕も……綺麗なお手々、僕専用のオナホールにしてあげる。嬉しいでしょ来須さん」  
「ひむうう、お、お口までズブズブ……んむううう！ お、お手々も、おっぱいも、アソコも……んはああ、は、激しすぎるううっ！」

ヒートアップした男たちには、もはや遠慮などなかった。スレイブノイドさながらの、いやそれ以上の獣性を剥き出しにして、少女を肉便器として犯しまくる。パリスリを楽しんでいた男もいつそうの快感を求めて激しく腰を突き出し、おっぱいを犯していた肉棒には意地悪くも集中して乳首を擦られた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



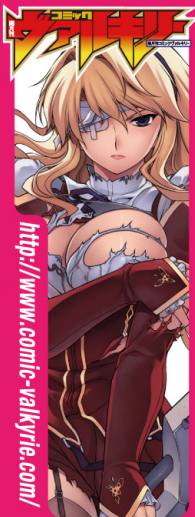




# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!